

鎌倉時代に大徳寺を開かれた大燈国師は「天然の気宇、王のごとし」と評され、鴨川の五条大橋の下の宿無し群衆の中で、悟後の修行をされたと言われています。大燈国師は弟子にあてて、コンパクトな遺誠を残しておられます。そこでは立派な伽藍や儀式などの形式に禅があるのではない、禅で大切なのは各自が自分自身を明らかにすることである、と示されています。現在では、大燈国師遺誠は大徳寺のみならず、全国の修行道場の修行僧に諷誦されています。

興禅大燈国師遺誠 こうぜんだいとうこくしゆいかい

汝ら諸人。この山中に来たって、道(どう)の為に頭(こうべ)をあつむ。
おまえ達よ。この大徳寺に来るのは、仏道修行のために集まったのだ。

衣食(えじき)の為にすること莫(なか)れ。
衣食のためにするのではないぞ。

肩あって着ずということなく、
口あって食らわずということなし。
肩があるのに、着物を着ないという事はなく、
口があるのに、食物を食べないという事もない。

ただ須(すべ)からく十二時中(じゅうにじちゅう)、おとただ昼も夜も一日中、
理屈をこえた無心の境地に向かい、探求し探求しつくすべきだ。

光陰矢(こういんや)の如し、
慎(つつし)んで雑用心(ぞうようしん)すること勿(なか)れ。
看守せよ。 看守せよ。
時間はあつという間に過ぎてゆく。
余計なことに心を用いないようにしなさい。
よく見て自分のものにしなさい。よく見て自分のものにしなさい。

老僧行脚(ろうそうあんぎゃ)の後(のち)、あるいは寺門繁興(じもんはんこう)、
私が亡くなったあと、もし大徳寺の禅が栄えて

仏閣経巻(ぶつかくきょうかん)金銀をちりばめ、多衆(たしゅう)開熱(にょうねつ)、
伽藍や経典をきらびやかに金銀で飾り、大勢の修行僧がにぎやかに、

或いは誦経(じゆきょう)諷咒(ふうじゆ)、長坐不臥(ちょうざふが)、一食卯齋(いちじきぼうさい)、六時行道(ろくじぎょうどう)、たとい恁麼(いんも)にし去るといえども、

もし、お経を唱え、長く坐禅し、日に一度だけの粗末な食事、日中三度夜三度の勤行などをしていても、

仏祖不伝(ぶつそふでん)の妙道(みょうどう)を以(もつ)て、
お釈迦さんや達磨大師が、言葉で伝えなかった素晴らしい道を

胸間(きょうかん)に掛在(かざい)せずんば、
常に胸中(きょうちゆう)にかかげ、求め続けなければ、

たちまち因果(いんが)を撥無(はつむ)し、真風地(しんぷうち)に墮(お)つ。
たちまち出家した意味が無くなり、真の仏法、祖師の宗風は地に墜ちる。

みなこれ邪魔(じゃま)の種族(しゅぞく)なり。
この者たちは修行を妨げる集団である。

老僧世(ろうそうよ)を去ること久しくとも、児孫(じそん)と称することを許さず。
私が亡くなり時がたっても、私の弟子と名乗ることは許さない。

或いは一人あり、野外に綿絶(めんぜつ)し、
一把茅底(いっばぼうてい)、折脚鑊内(せつきやくしょうない)に
野菜根(やさいこん)を煮て、喫して日を過すとも、
もし一人の修行僧が、野外で独り離れて修禅し、
一握りほどのあばら家で、脚の折れた割れ鍋に
野菜を煮て、食べるような、質素な一日を過ごしていても、

専一(せんいつ)に己事(こじ)を究明(きゅうめい)する底は、
自分の心だけを追求して明らかにする者こそが、

老僧と日日相見(にちにちしょうけん)、
報恩底(ほうおんてい)の人なり。
私と日々相い対面し、
お釈迦さんや達磨大師の恩に報いる人である。

誰か敢(あ)えて軽忽(きょうこつ)せんや、
そのような人を誰があえて、軽んじ軽蔑するだろうか。
勉旃(べんせん)勉旃(べんせん)。
これを勉めなさい。これを勉めなさい。